

発行

名古屋大学大学院 国際開発研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

tel/052-789-4953 fax/052-789-2666

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>

「ウェルビーイングについて思うこと」

研究科長 伊東 早苗

平成25年度文部科学省「博士課程教育リーディングプログラム」に国際開発研究科が本学の他3研究科(医学系研究科、教育発達科学研究科、生命農学研究科)とともに申請した「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラムが採択されました。平成24年度「大学の世界展開力強化事業(ASEAN諸国等との大学間交流形成支援)」と並び、本研究科では現在2件の競争的資金による事業を運営していることになります。

「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラムの目的は、様々な発展段階にある多文化社会アジアにおいて、ウェルビーイングを実現するための女性リーダーを養成することです。そもそも「ウェルビーイング」とは何でしょうか。本プログラムでは、「ウェルビーイング」を「個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあること」と定義しています。もちろん定義はひとつではなく、他にも様々な定義することができます。重要なことは、「ウェルビーイング」とは何かを国際的な視点で考え、その実現に貢献することが、本研究科がめざす目標と重なるということです。その意味で、本プログラムが採択されたことは、本研究科にとって重要な意味をもちます。

第二次世界大戦後に体系化が進んだ国際開発学においては、長い間、経済的な貧困問題の解消が中心的課題とされてきました。しかし、1980年代から、開発の目的は低所得の解消に限定されず、知識を得て健康な人生を送るための「人間開発」の達成が重要であるという議論が次第に影響力を増していきました。その後、「開発される」側の人々が困難な状況の中で発揮する主体性や、彼らが主観的に感じる「生活の質」にもっと注目すべきであるとの認識も生まれました。近年では、人々が抱く「ウェルビーイング」や「幸福」といった感情は、経済学、心理学、保健学、社会学、人類学等の分野でも重要な分析課題になっていますが、国際開発学ではこの課題に対し、早くから学際的に取り組んで

きたといえます。

人々が主観的に感じる幸福度(もしくは「ウェルビーイング」の度合い)が重要であるとの認識について書きましたが、人間が生活する上での基本的なニーズが満たされない状態では、幸福感が生まれにくいこともまた事実です。また、ある人が主観的には幸福であっても、栄養失調で、衛生状態の悪い環境に暮らしているとすれば、その人の主観性だけを尊重して、何もしないことが正しいとはいえません。しかし、基本的ニーズが一定の水準まで満たされた後は、収入向上が必ずしも幸福感の高揚と比例しないという研究結果もあります。日本で生活する私たちのうち、一体どれくらいの割合の人々が、日々幸福を感じ、身体的、精神的、社会的に良好な状態を享受しているといえるのでしょうか。豊かな人生が人間の幸福感を支え、また、幸福感は人間の人生を豊かにします。



日本では、男性よりも野心的に「ウェルビーイング」を追求し、長生きしている「おばちゃん」が大変多いように思います。それが本当であるとするれば、「おばちゃん」予備軍である日本の若い女性たちには、「ウェルビーイング」を達成する豊かな素質が備わっているはずです。将来はアジア全体における「ウェルビーイング」実現を牽引するリーダーとして、是非とも活躍していただきたいと思います。その一方で、「ウェルビーイング」の達成に消極的とも見える哀しきおじさまとその予備軍を巻き込んで、男女ともに豊かな生活を送ることのできる日本社会の達成にも貢献していただきたいと思います。この分野におけるリーダーになるための第一歩は、まずは自分自身の生活の中で「ウェルビーイング」を実現することです。本研究科の女性リーダーとして、私自身も世の「おばちゃん」を見習い、豊かな人生の実現にむかって、今後一層の努力をしてみたいと思います。

TOPICS

「ウェルビーイングinアジア」実現のための 女性リーダー育成プログラム

教授 岡田 亜弥

国際開発研究科が、医学系研究科、生命農学研究科、教育発達科学研究科とともに、文部科学省平成25年度博士課程教育リーディングプログラムに申請した『「ウェルビーイングinアジア」実現のための女性リーダー育成プログラム』が採択されました。

本プログラムは、さまざまな発展段階にある多文化社会アジアにおいて、ウェルビーイング（個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあること）を実現するために、異文化相互理解に立脚した国際性と使命感を兼ね備えたグローバルに活躍できる女性リーダーを育成することを目的とする5年間一貫の大学院プログラムです。具体的には、貧困問題、多様な健康問題、ジェンダー格差などウェルビーイングの実現に密接に関わる食、環境、健康、社会システム、教育に関する諸課題の解決に向けて、国際開発学・医学・農学・教育学の各分野で獲得した高度な専門性を活かし、グローバルな視点で意思決定できる女性リーダーの育成を図ります。関連研究分野の連携による新たな「統合知」の創出により、個別の学問領域では解決しえない課題へ俯瞰的な視点でアプローチし、課題解決に取り組む人材を育成します。アジア諸国に比べ、日本では、女性に

とって身近なウェルビーイング関連分野でさえ、女性リーダーは極めて限定的なことから、アジア各国の女性リーダーとネットワークを構築し、共通課題解決のためのパートナーシップを強化するためにも、女性リーダーの育成は喫緊の課題です。女性にフォーカスした横断型大学院プログラムは本学で初めての試みですが、全国的にも総合大学では例がなく、非常に画期的です。

平成26年10月に本格始動する本プログラムでは、海外実地研修やインターンシップなどの実践的教育、語学力強化プログラム、リーダーシップ教育などを重視しています。履修学生は、毎年、各研究科に入学した前期課程1年次の学生の中から数名が選抜されますが、彼らには、出身研究科での従来の履修要件に加え、本プログラムのための特別なカリキュラムが提供されます。本プログラムを通じて、多くの女子学生が将来のグローバルリーダーに育つことを期待しています。



▲「ウェルビーイング in アジア」キャリアガイダンス特別講演会
(垂井美枝子元UNICEF本部人事次長)

2015年ASEAN統合に関する 連続国際シンポジウム

名古屋大学バンコク事務所副所長
国際化推進教員 講師
カンピラパーブ・スネート

2014年2月21日（金）、22日（土）の両日、野依記念学術交流館カンファレンスホールにて、2015年ASEAN（東南アジア諸国連合）統合に関する連続国際シンポジウムが開催された。本シンポジウムでは、ASEAN統合の政策立案に直接携わったスリン・ピッスワン前ASEAN事務総長による基調講演およびASEAN諸国の政府関係者・研究者によるパネルディスカッションが催された。2015年に統合が予定されているASEAN共同体の設立が目前となり、多くのASEAN関係者、研究者、学生、一般の方々などが高い関心を寄せている。2日間のシンポジウムには延べ約300名の参加があり、大盛況で閉幕した。

第1日目は、「ウェルビーイングinアジア実現のための女性リーダー育成プログラム」と共催で、「2015年ASEAN統合がASEAN諸国の人々のウェルビーイングにもたらすものは何か？」というテーマでシンポジウムが開催され、スリン博士が同テーマに関連する特別講義を行い、会場から熱気にあふれた質疑応答が行われた。その後のパネルディスカッションでは、ラオス教育・スポーツ省副大臣のセンドゥアン・ラチャンタブーン女史やタイ王国教育省次官のスタッシー・ウォンサマーン博士といった閣僚級パネリストより報告があった。加えて、パネリストのリザル・アフアンディ・ルクマン博士（インドネシア経済担当調整大臣府次官および名古屋大学全学同窓会インドネシア支部長）、ギン・チャンリット博士（カンボジア王立プノンペン大学開発学部学部長）、ハディジャ・イペラヒム博士（マレーシアマラ工業大学シニア講師）、マリオ・ホヨ・アグハ博士（フィリピンミンダナオ州立大学ジェネラ

ルサントス校教授）およびレ・ヴィエト・アン博士（ベトナム計画投資省対外経済関係局副局長）は、本研究科で博士号を取得した後、本国で活躍している元留学生であった。

第2日目は、「教育のリージョナリゼーション：2015年ASEAN統合は何をもたらすのか？」のテーマでシンポジウムが開催され、統合を迎えるにあたり、ASEAN諸国が今後どのような枠組みで教育分野での連携をはかり、どうすれば「ASEAN市民」という共通のアイデンティティを育成することができるのかを議論した。スリン博士は「2015年ASEAN統合に向けて－教育と『ASEAN市民』の育成－」と題した基調講演を行い、ASEAN統合における教育の役割を論じた。その後、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(A)）（研究代表者：平田利文大分大学教授）の研究者らにより「ASEAN諸国における市民性教育とアセアンネスのための教育」と題したパネルディスカッションがあり、ASEAN統合に向けた実践的な教育モデルが紹介された。

ASEAN統合を巡る動きは、ASEAN域内のみならず、日本を含むアジア太平洋諸国からも大きな注目を集めている。ASEAN各国の有識者を招いたこれらのシンポジウムは、ASEAN地域に対する理解を深めると同時に、ASEAN地域の対話・協力の進展に大いに寄与したといえる。



▲スリン・ピッスワン前ASEAN事務総長を囲んでの記念撮影

海外実地研修 2013

海外実地研修実施委員会 委員長 岡田 亜弥

開発協力人材の育成において、現場での課題解決能力を醸成するには実践的な経験が重要との認識から、国際開発研究科は、1992年より20年以上にわたり、毎年、カリキュラムの一環として、海外実地研修(Overseas Fieldwork: OFW)を発展途上国の農村地域で実施しています。OFWは、途上国の人々の生活状況を学ぶ重要な学習機会です。2013年度には、カンボジア・シエムリアップ州で、同国での5度目となるOFWを、33名の大学院生が参加して実施しました。参加学生は、5月から7月末にかけて10数回、カンボジアの開発問題に関する事前講義を受講するとともに、①コミュニティ開発、②労働移動、③教育、④観光開発の4つのテーマ別グループに分かれ、調査計画を策定し、データ収集の方法を検討しました。

9月後半の2週間、王立プノンペン大学(RUPP)の教員・学生の協力を得てフィールドワークは行われました。シエムリアップ州は、有名なアンコールワットなど歴史的遺産を擁する世界的観光地がある一方、意外なことに同国の貧困州のひとつです。市街地から10分も車を走らせれば、あっという間に貧しい農村の風景が広がります。参加学生は、連日、朝から日暮れまで、村人や行政官、NGO職員を対象に聞き取り調査を行い、フィールド

調査の基礎を学ぶとともに、課題を抽出し、解決のための方策を考察しました。各グループは、出身国、性別、専攻の異なる学生で編成されており、調査活動を通じてチームワークの大切さも学びました。調査結果は、RUPPで開催された報告会で英語で報告され、同大学の教員からコメントを得て最終報告書にまとめられました。

なお、今回のOFWは、「大学の世界展開力強化事業(キャンパスアセアン)」の一環として実施され、同事業より参加学生の渡航費が支給されました。フィールドワーク後、王立法経大学において、同大学・RUPPと共催で、「カンボジアの経済社会発展の今日的課題」と題する国際共同セミナーを開催し、OFW参加学生は、カンボジア内外の研究者による研究発表を聞き、討論に参加する機会も得ました。

OFWの実施にあたっては、RUPP関係者ならびにシエムリアップ州・調査村の多くの人々にご協力いただきました。ここにあらためて感謝の意を表します。



▲報告会後の参加者集合写真
(カンボジア・王立プノンペン大学)

国内実地研修 2013

国内実地研修実施委員会 委員長 米澤 彰純

GSIDでは、毎年近隣の地方自治体ならびに関係機関のご協力を得て、国内実地研修を実施している。学生は、研修を通じて開発現場を知り、フィールド調査の基本的な方法や姿勢、調査倫理などを習得する。同時に、日本も含めて多様な国々から集う学生が共同作業を通じて、日本の地域開発をめぐる諸問題に取り組むよい機会でもある。

2013年度は、2012年度に引き続き、愛知県瀬戸市の協力を得て10月23～25日に現地調査、11月29日に結果報告会を行った。実地研修には、博士課程前期課程1年生18名(日本人学生5名、留学生13名)が参加し、3つのワーキンググループに分かれて関係機関でのインタビュー調査、質問紙調査、資料収集を行った。また、教員3名が引率にあたり、5名のティーチング・アシスタントが運営や通訳等の補助を行った。また、事前学習の一環として、瀬戸市商工会議所の加藤滋樹氏に瀬戸市の文化、歴史、産業、社会、教育について講義をしていただいた。

瀬戸市は、人口は13万人を超える愛知県下有数の市であり、また、陶磁器の代名詞とも言える「せともの」の名で全国的に知られている。工業団地や住宅地の開発が進んだ地域ではあるが、商店街などが位置する旧市街の再活性化や、伝統産業である窯

業を活かしながらグローバル時代における産業振興をどう進めるかが課題となっている。また、人口は安定的に推移しているが着実に高齢化も進行しており、また、製造業などで働く外国人のコミュニティも存在する。

今回の実地研修では、我々の特徴である、多文化の若者たちの新鮮な視点を活かすという観点から、「伝統的な商店街の持続的な発展」、「イベントを通じた陶磁器産業の再活性化」、「外国人住民との情報共有による多文化共生」をテーマに取り上げて調査を行った。商店街の中にあるNPO・窯のひろばを利用していただき、おいしい食事をいただきながらのアット・ホームな結果報告会を開催できたのがよい思い出である。GSIDや名古屋大学の卒業生、学生やスタッフが、瀬戸市の地域社会とその活動に深く入り込んでいることもわかり、大いに励まされた。御協力いただいたすべての方々に心より感謝を申し上げます。



2013年度 学位授与状況

2013年度に当研究科(GSID)より授与された学位の取得者数は以下のとおりです。

後期課程博士学位取得者8名。取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)4名、国際協力専攻(DICOS)1名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)3名です。

前期課程修士学位取得者は64名。取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)26名、国際協力専攻(DICOS)17名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)21名です。



▲博士学位取得者記念撮影



▲修士学位取得者記念撮影(DID)



▲修士学位取得者記念撮影(DICOS)



▲修士学位取得者記念撮影(DICOM)

入学状況

2014年度 4月 入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	29 19 49	17 10 25	10 9 17
国際協力	21 20 45	9 16 29	8 16 23
国際コミュニケーション	23 16 29	18 11 22	16 10 20
合計	73 55 123	44 37 76	34 35 60

※注…赤は女性、青は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	7 9 12	7 7 10	7 7 10 6
国際協力	3 7 8	2 6 7	2 5 6 5
国際コミュニケーション	5 4 6	5 4 6	5 4 6 3
合計	15 20 26	14 17 23	14 16 22 14

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

2013年度 10月 入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	2 5 5	2 5 5	2 5 5
合計	2 5 5	2 5 5	2 5 5

※注…赤は女性、青は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	1 2 2	1 1 1	1 1 1 0
国際協力	0 0 0	0 0 0	0 0 0 0
国際コミュニケーション	0 0 2	0 0 2	0 0 2 0
合計	1 2 4	1 1 3	1 1 3 0

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

学位取得者のことば

国際開発専攻 博士(国際開発学) 平野 夢香

私は、GSIDの修士及び博士課程を経て、博士号を取得致しました。素晴らしい研究環境を提供くださったGSID、厳しく熱心にご指導下さった大坪先生、藤川先生、新海先生に心から感謝しています。

この5年間、私は、貧困削減・格差是正における効果的開発援助とは何かをテーマに、マクロ実証分析及び現地調査に基づく事例分析の双方を用いて、研究に取り組みました。世界に実存する開発課題を分析し、政策に生かされる研究を行う能力を得たこと、途上国の現場で学んだこと、仲間と切磋琢磨したことは、私の人生の宝物です。

この春から、世界銀行東アジア大洋州地域総局にてエコノミストとしてのキャリアを開始しました。GSIDでの経験を生かし、世界の貧困問題解決に資する仕事に励み、社会に貢献できるよう努めて参ります。



DICOS Ph.D. (International Development) Ron Vilog

For four long years, my world revolved around an academic masterpiece called the dissertation. Presentations within and outside the university were exciting and challenging, but more than the refined theories that I defended in our seminars, my academic journey has perhaps equipped me with the lens to see, appreciate and understand the lives of my research subjects: the Filipino migrants. I believe that we have so many under-examined issues to explore as researchers, but simply listening to the narratives of the migrants opens growing possibilities: giving them a voice, bringing some unspoken truth out in the open, with the hope that someone else could look in the direction where I focused some light. I know for certain that this is just the start of discovering social realities that can make a difference in the lives of the migrants.



国際コミュニケーション専攻 博士(学術) チャガイ・アリョーナ

私がGSIDで学んだ4年間は確固たる財産となり、「世界への旅」とたとえられます。それはGSIDで、世界各地からの学生とともに研究活動や日常の交流をすることで、多種多様な文化や考え方に触れ、国境を越える知識が習得できたからです。またそれはオープンマインドな先生方の指導があったからだと思います。この貴重な経験を通じて、人生のビジョンが限りなく広がり、未来志向が強くなったと実感しています。

博士論文の執筆過程の中で、研究者としての資質のみならず、粘り強さや忍耐力が培われ、難局を乗り切る精神力が高まりました。そして、人との「出逢い」、人に対する「感謝」と「寛容」であることの大切さも学びました。それらの信念を貫きながら、これからも社会においてさらに活躍し、平和や希望溢れる明るい未来に繋げていきたいと思っています。



GSID教員の新刊紹介

『新興国家の世界水準大学戦略—世界水準をめざす アジア・中南米と日本』

フィリップ・G. アルトバック、ホルヘ・バルン編
東信堂 (2013年6月刊行) 米澤 彰純 (監訳)

アジアや中南米の新興国家が存在感を増してきている。これは、経済や産業の話だけではなく、大学やその研究・教育活動でも同じである。現在の日本政府は、世界大学ランキング100位以内に入るような世界水準の大学の形成を支援すべく、「スーパーグローバル大学」と呼ばれる事業を始めようとしている。そもそも、ランキングに載るような大学になることは、どのような意味があるのか。こうした世界水準の大学作りは、日本や欧米などの先進国よりも、むしろ新興国家の間の方が盛んである。本書は、長年世界の様々な国々の大学の発展のあり方を比較してきた編者や各国の専門家たちが、成長著しい

アジアの新興国家である中国・韓国・インド、そして、メキシコやブラジルなどをはじめとする中南米の新興国家がどのようにして現在自分たちの国の代表的な大学を改革し、世界水準の大学に転換しようとしているかを様々な観点から論じたものである。日本の読者にわかりやすいように、編者の快諾を得て、監訳者による日本についての章も加えられている。変わりゆく新興国家の開発問題としてなぜ大学や研究活動が意味を持つのかを考える上で、重要な著作である。



『国際法入門 ― 逆から学ぶ ―』

法律文化社 (2014年4月15日刊行) 山形 英郎 (編著)

本書は国際法の入門書である。そしてまた国際法の教科書でもある。何の変哲もない国際法の教科書である。でもちょっぴり変わったところがある。副題が示すように「逆から学ぶ」ことをコンセプトにしている。国際法の入門書や教科書はたくさん出版されているが、多くは、「正順に学ぶ」教科書である。何が正順であるかは、国際法を知らない人には理解しづらいかもしれない。また正順がそもそも存在するのかについても怪しいが、一般の教科書は、「国際法は法か」に始まり、国際法の歴史、基本原則、法源や法主体について学んだあとで、個別のテーマに入っていく。「総論から各論へ」という正順にしたがっている。しかし本書は、それを「逆から学ぶ」ようにしている。いわば「各論から総論へ」という逆順に国際法を

説き起こしているのだ。「国際法は法か」という問いは、国際法につきまとう本質的な問題であるが、この問題を解くためには国際法の全般的知識が不可欠だ。国際法の知識なしに、この問題を議論したところで、初学者はちんぷんかんぷんであろう。本書は、国際法の講義体系に大いなる疑問を提起したささやかな書物である。国際法をまったく勉強したことがない人にお勧めしたい。

ちなみに、第18章国際経済法は、本研究科の川島富士雄先生の執筆によるものである。要チェック。



公開講座

「戦争と平和の国際協力」

准教授 西川 由紀子

本公開講座は、暴力、戦争、平和をテーマに、政情が不安定な国や地域で活動してきた講師陣を迎えて3回シリーズで行った。2013年10月4日の第1回目の講座では、本研究科の西川由紀子が、世界に広まった小型武器の問題とそれに対する取り組みについて講演を行った。アフリカ諸国の武力紛争や南米諸国の犯罪で使用されている小型武器がどのように世界に広まったのか、それに対する取り組みや日本との関連について紹介した。

10月18日の第2回目の講座では、米川正子氏(立教大学21世紀デザイン研究科)が、ルワンダおよびコンゴ民主共和国における虐殺、戦争、侵略について、人権と開発の視点から講演を行った。国連難民高等弁務官事務所のゴマ所長として活動した経験を交えて、今日も続く人権侵害と残虐行為に警笛を鳴らすとともに、メディアに

報道されていない現況を紹介した。

10月25日の第3回目の講座では、清末愛砂氏(室蘭工業大学工学研究科)が、シンガポールにおけるファミリー・バイオレンスに関する法制度の改革と今後の課題について講演を行った。多民族国家シンガポールで導入された「女性憲章」下でのファミリー・バイオレンスに対する取り組みについて、女性の人権の観点から解説した。

本講座を通して、今日の戦争、暴力と平和の問題について受講者の皆さんとともに考える有意義な機会となった。



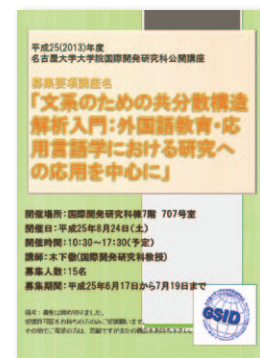
「文系のための共分散構造解析入門：外国語教育・応用言語学における研究への応用を中心に」

教授 木下 徹

本講座は、平成25年8月24日(土)午前10時30分から午後5時30分までの予定で定員15名として、本研究科7階言語情報処理室で開催した。内容は、いわゆる文系の分野でも、多数の因子や変数の関係を総合的に把握するニーズが高まっていることを背景に、そのための統計手法の1つである共分散構造解析と、特化したソフトウェアの1つであるAMOSについて、基本を解説し、参加者がそのソフトを動かして、共分散構造解析における理論のモデル化とモデルのデータによる検証等を体験してもらうことを目指した。

入門とはいえ、テクニカルな響きは否めず、十分な応募者があるか懸念したが、募集期間の半ばには定員に達し一安心した。参加者は、現役の学生・院生で、本研究科の受験も考慮中の方もあれ

ば、高校・大学の教員、民間企業の従業員から、定年退職された方まで、予想以上に多種多様であった。夏の盛りに7時間以上に及んだが、拙い講義とソフトの説明にもかかわらず、熱心に聴講して下さり、中には、数週間後に、メールで講義内容について質問されてきた方もあり、講師として、ささやかながら社会貢献ができたと思わせていただいた体験であった。



新スタッフ紹介

国際コミュニケーション専攻 准教授 井土 慎二

次は「^ふ降^{まち}町」です。

一昨年、新潟市内でバスに乗ったときの車内放送である。何が降ってくるのか。思わず窓外を見ると停留所が見えた。「古町」と書いてあった。新潟市の発音ではフルマチ(^高ふ^低る^低まち)らしい。

同様の経験を名古屋でもした。単語はメイダイ(^低め^高い^高だい)。東京人には「命題」に聞こえる。明治大学の略称「明大」にも聞こえる。私もメイダイは命題もしくは明大だと思っていた。ところが、名古屋に住み始めたら様子が違う。メイダイは名古屋大学であるらしい。このたび名大に採用になった。命題「メイダイは名大を指す」が明大でも真になる程に名大が明大のある東京でも認知されればなあ、と帰省すると思う。



英語論文執筆補助担当

助教 Francis Peddie (フランシス ペディ)

私の出身地はカナダのトロントです。ヨーク大学を卒業し(博士、2012年)、ソーシャル・ヒストリー、オーラル・ヒストリーを中心に、現代ラテンアメリカの歴史を専門としています。なかでも、メキシコにおける日系人、カナダにおけるチリ人、チリ系カナダ人のコミュニティに焦点を当てて研究しています。博士論文では、カナダにおける亡命チリ人のコミュニティについて、トランスナショナルな歴史研究を行ってきました。集合的記憶やナショナル、グループのアイデンティティ、ナショナル・コミュニティの帰属についての解明を研究しています。



ウェルビーイング in アジアプログラム担当

特任准教授 三牧 純子

2014年2月から「ウェルビーイングinアジア」実現のための女性リーダー育成プログラムの担当教員として着任しました。私は、これまで(独)国際協力機構(JICA)の職員として災害マネジメントに関わる業務等に関わってきました。また、日本国内においても過疎地における地域づくりについての調査を行ってきました。このため地域の特性やリソースを活かしたコミュニティ開発に関心があります。



同プログラムを通じ「将来国際的に自身の専門性を活かして活躍したい」と考える次世代のリーダーの育成に貢献できればと思っています。着任後数か月が経過したばかりですが、アジアのWell-Beingの向上に意欲的な教員や学生の皆様と既に多く出会うことができ、今後の展開がとても楽しみです。どうぞよろしくお願いいたします。

ウェルビーイング in アジアプログラム担当

特任助教 桑垣 隆一

2014年2月に「ウェルビーイングinアジア」実現のための女性リーダー育成プログラム特任助教として着任しました。主に同プログラム海外実地研修に関する業務を担当しております。



私は(独)国際協力機構(JICA)の専門家としてラテンアメリカにおける女性グループ活動を支援し、GSIDにおいては国際開発専攻に在籍して女性グループ活動を制度の側面から研究してきました。その知見を活かし、学生の皆様が女性リーダーというものを考える際のお手伝いができればと考えております。

女性教員の割合が高いプログラムです。男性の視点が必要なときは気軽に声をかけてください。

ウェルビーイング in アジアプログラム担当

特任助教 荻巣 崇世

2014年3月1日より、「ウェルビーイングinアジア」実現のための女性リーダー育成プログラムの特任助教として着任しました。教育学的な視点から、主にカンボジアの教員政策・教師教育を研究しています。修士時代はGSIDの国際開発専攻に在籍し、海外実地研修やUNESCOバンコク事務所でのインターシップなど、非常に濃密で刺激的な2年間を過ごしました。その後米国に渡り、このほど博士課程を終えて帰国しました。地元名古屋に、そして母校GSIDに教員として戻ってこられてとても嬉しく思っております。ウェルビーイングプログラムを通して、GSIDの学生の皆さんがアジアのリーダーとして国際的に活躍するための土台作りをお手伝いできればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



客員研究員の紹介

国内客員研究員

[H25] 黒田 一雄(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授)

研究課題: アジア高等教育のガバナンス
期 間: 平成25年6月~平成25年11月

酒井 啓亘(京都大学大学院法学研究科・教授)

研究課題: 国連平和維持機能の多元的展開
期 間: 平成26年1月~平成26年3月

米倉 雪子(昭和女子大学人間文化学部・准教授)

研究課題: 国際協力による貧困削減、生活改善支援: 農業開発協力と保健医療協力をつなぐ試み-カンボジア農村の貧困と保健医療費問題
期 間: 平成25年7月~平成25年9月

荒木美奈子(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科・准教授)

研究課題: タンザニアにおける地域開発実践と住民組織に関する研究
期 間: 平成25年1月~平成26年3月

高橋 公明(名古屋大学・名誉教授)

研究課題: グローバリゼーションと文化交流
期 間: 平成25年1月~平成26年3月

[H26] 寺尾 康 (静岡県立大学国際関係学部・教授)
研究課題: 言語産出研究 - 方法論における課題と展望
期 間: 平成26年7月～平成26年9月
沢畑 亨 (水俣市久木野ふるさとセンター・愛林館・館長)
研究課題: わが国における草の根レベルの実践的農村地域振興
期 間: 平成26年5月～平成26年9月

外国人客員研究員

[H25] Heenkenda Mudiyansele Shirantha Chaminda Bandara
(スリジャヤワルデネプラ大学経済学部・シニアレクチャー)
研究課題: スリランカのファイナンシャルインクルージョンにおける格差
期 間: 平成26年1月1日～平成26年2月14日
Duwa Pathirage Sarath Chandrakumara
(スリジャヤワルデネプラ大学経済学部・シニアレクチャー)
研究課題: スリランカにおける新卒の雇用可能性: 質の向上への効果
期 間: 平成26年2月15日～平成26年3月31日
[H26] Maria Angeles Ocampo Catelo (フィリピン大学ロスバニョス校・准教授)
研究課題: グリーン成長に向けたフィリピンにおける畜産業の経済学
期 間: 平成26年4月22日～平成26年7月6日
Mohammad Jiaul Hoque (バングラデシュ農業大学・准教授)
研究課題: バングラデシュにおける普及員およびソーシャルワーカーの技能形成
期 間: 平成26年7月16日～平成26年9月30日

西川 芳昭 (龍谷大学経済学部・教授)
研究課題: 農村開発における地域資源の把握
期 間: 平成26年4月～平成26年6月
小林 知 (京都大学東南アジア研究所・准教授)
研究課題: 現代カンボジアにおける社会的流動性に関する研究
期 間: 平成26年6月～平成26年8月

Lee Nyet Ngo (Molly Lee) (教育コンサルタント)
研究課題: アジアにおける高等教育と女性のリーダーシップ
期 間: 平成26年10月21日～平成27年3月20日
Heng Naret (王立ブノンペン大学・講師)
研究課題: カンボジアにおけるモデル農民に関する知識の習得と共有を通じた農村生計向上
期 間: 平成26年4月2日～平成26年7月31日
呂 珍珍 (Lu Zhenzhen) (広州大学・講師)
研究課題: 農村社会における民俗芸能の実態と伝承
期 間: 平成26年7月1日～平成26年9月30日

スタッフの人事異動

教 員

- 平成25年8月1日 着任
国際協力専攻 助教 **PEDDIE Francis**
- 平成25年10月1日 着任
国際コミュニケーション専攻 准教授 **井土 慎二** (愛知県立芸術大学・准教授から)
国際コミュニケーション専攻 助教 **松本 多恵**
- 平成26年2月1日 着任
特任准教授 **三牧 純子** 特任助教 **桑垣 隆一**
- 平成26年3月1日 着任
特任助教 **萩原 崇世**
- 平成26年3月31日 退職
国際コミュニケーション専攻 助教 **松本 多恵**
- 平成26年4月1日 配置換
国際協力専攻 助教 **笠 浩一朗** (国際コミュニケーション専攻から)
- 平成26年5月31日 退職
国際開発専攻 助教 **NGOV Penghuy**
- 平成26年6月1日 着任
国際開発専攻 助教 **LIU Jing** (本研究科特任助教から)

事 務

- 平成25年7月1日 転出
教務G **中野 善之** (工学部・工学研究科総務課へ)
- 平成25年7月1日 転入
総務G **竹谷 恵子** (工学部・工学研究科総務課から)
教務G **野々村 嘉穂** (総務部総務課から)

協力教員の交代

教育発展講座
旧: **五十嵐 祐** (大学院教育発達科学研究科)
新: **高井 次郎** (同上)
旧: **渡邊 雅子** (大学院教育発達科学研究科)
新: **西野 節男** (同上)
国際文化協力講座
旧: **古尾谷 知浩** (大学院文学研究科)
新: **梶原 義実** (同上)

名古屋大学大学院国際開発研究科 広報委員会

オープンキャンパス 2014 に関するお知らせ

下記の要領で「オープンキャンパス 2014」を開催します。皆様のご来場をお待ちしております。

日 時 平成26年7月12日(土) **会 場** 名古屋大学大学院 国際開発研究科棟 (地下鉄名城線「名古屋大学」下車)
(事前予約不要) 地図はホームページを参照ください。
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/general/map.html>

内 容 プログラム

- | | |
|--|--|
| <p>(1) 留学生相談 11:00～14:00</p> <p>(2) 施設見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ●図書室 11:00-13:00 ●言語情報処理室(コンピュータールーム) 11:00～12:30 <p>(3) 導入部 スライド上映 13:00～13:05
海外実地研修・国内実地研修画像放映</p> <p>(4) 院生によるGSID紹介 13:05～13:45
院生による特色ある社会貢献活動、インターシップ体験談を含む</p> | <p>(5) 全体説明会 14:00～14:50</p> <ul style="list-style-type: none"> ●専攻及び教育プログラムの特徴 ●GSIDの入学生の構成、就職先 ●入学試験の説明 ●公開講座の案内 ●リーディング大学院等の案内 など <p>(6) 専攻別説明会と個別相談 15:00～16:00</p> <ul style="list-style-type: none"> ●各専攻別説明会(教育プログラムを中心に) ●個別相談(教員と院生が対応) <p>(7) 展示 11:00～16:00
海外実地研修、国内実地研修、研究科出版物 など</p> |
|--|--|

お問い合わせ先 / opencampus@gsid.nagoya-u.ac.jpInformation
お知らせ